

歴史的建造物復原による 気仙沼の復興まちづくり



一般社団法人 気仙沼風待ち復興検討会
マヌ都市建築研究所、ユー・エス・シー、文化継承建築設計事務所、
ササキ設計、アルセッド建築研究所

宮城県気仙沼市内湾地区

1. 災害復興における歴史的建造物の再建支援の現状

近年、我が国では災害が多発している。災害では、直接的被害により多くの歴史的建造物が失われるだけでなく、復興の過程において、間接的に数多くの歴史的建造物が失われてきた。一方、災害復興における歴史的建造物の再建に資する制度も構築され、段階的にその取り組みが拡充してきた。

しかし、歴史的建造物群を地区として複数棟まとまった形で再建することは未だ困難であり、地震被災地では幾つかの実践報告があるが未だに少数であり、津波で大規模に被災した被災地での実践報告はない。ここでは、東日本大震災被災地気仙沼市内湾地区において、津波によって大規模に被災した歴史的建造物を地区のまとまりの中で群として複数棟再建する仕組みを新たに構築し、実践した取り組みについて紹介する。

2. 津波で被災した歴史的建造物再建の課題

①資金調達と体制構築の課題

歴史的建造物の再建支援に対する資金調達の方法とそれを運営する体制を独自に確立することが課題となった。

②応急復旧と基盤整備に伴う課題

震災直後の応急復旧において、流失した部材の確保や津波で流された建造物の曳家等による応急保存の必要性が発生。また、高上げ区画整理などの都市基盤整備に対応した保存計画を作成する必要がある、基盤整備に伴う曳家や部材保管等の場所の確保が課題となった。

③再建の時限的制約の課題

再建者の再建需要は、個々の生活再建需要、様々な補助事業制度の期限等、スケジュールの時限的制約がある。津波被災地では、基盤整備等の長期化する工事スケジュールや資金調達と、時限性のある再建者の再建需要の調整が課題となった。



再建スケジュール

④法適合の課題

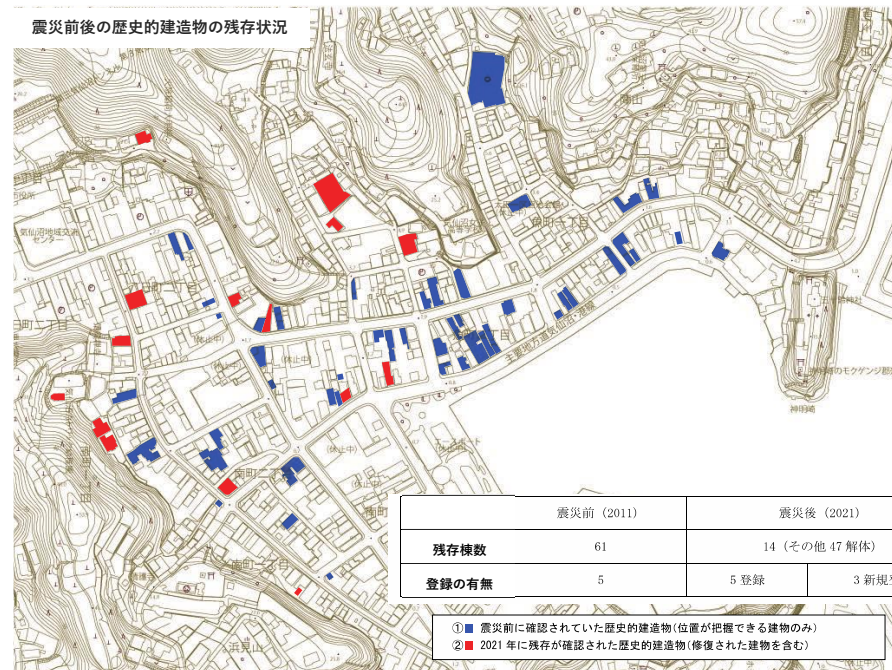
津波で建物の大部分が流失することで再建は建築行為となる。歴史的建造物（文化財）としての価値を担保しながら、建築基準法に適合させることが困難となる場合も多く、物件毎にその法適合が課題となった。

3. 宮城県気仙沼市内湾地区の歴史的建造物の被災状況

宮城県気仙沼市の内湾地区（風待ち地区）は約350棟の歴史的建造物を擁する三陸海岸きっての風光明媚な港町であった。「風待ち」とは船乗り達が船出の風を待ったことに由来し、港町として繁栄したが、大正4（1915）年と昭和4（1929）年の大火で港に面する内湾地区では市街地の大半が焼失した。いずれも全国からの支援で復興を果たし、和洋折衷のモダンな近代建築が立ち並んだ。

震災以前、平成14（2002）年に発足した「風待ち研究会」により、気仙沼内湾地区では国登録有形文化財への登録が推進されていた。平成23（2011）年の東日本大震災では、風待ち地区の歴史的建造物の多くが地震と津波により甚大な被害を受け、港に面する内湾地区でもより多くの被害が発生した。震災前の内湾地区における残存状況確認では61棟の歴史的建造物が確認されており、その内国登録有形文化財は5棟であった。震災から10年後の令和3（2021）年の残存状況は、内湾地区において14棟の歴史的建造物が確認された。その内5棟が被災した登録文化財の修復、3棟が新たに登録文化財に登録され修復された建物である。残り6棟は被災を免れた歴史的建造物であった。その他47棟の建物は津波で流失したものや残存していても全壊判定を受け解体された。

震災前後の歴史的建造物の残存状況



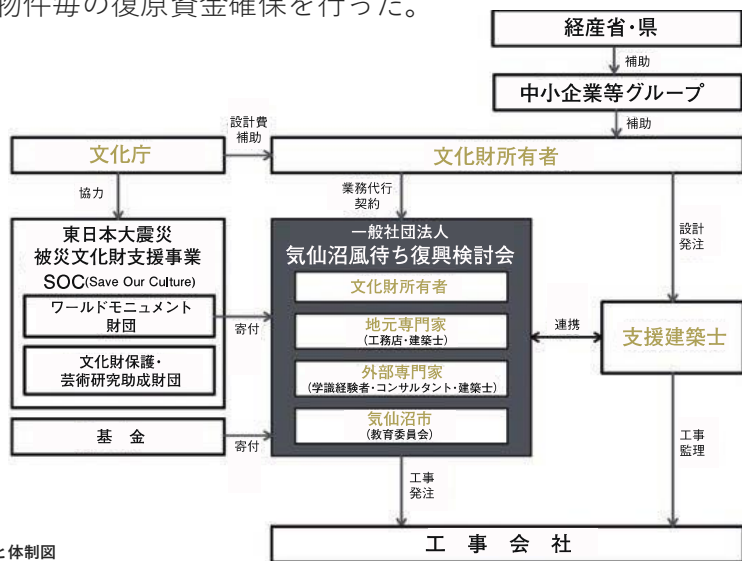
4. 資金調達と体制構築への対応

宮城県では、東日本大震災の復興基金による歴史的建造物への再建支援メニューが立ち上がらず、歴史的建造物の再建支援に対する資金調達の手法とそれを運営する体制を独自に確立することが課題となった。

被害を受けた内湾地区の歴史的建造物を復原するために、文化財所有者や地元専門家などを中心に「一般社団法人気仙沼風待ち復興検討会」を設立した。この団体は、復原資金を国内外から調達すると共に、文化財所有者に代わり、設計発注や工事発注などの事業代行を担っている。設計体制は、文化財などの設計実績のある地域外の設計者と宮城県建築士会のメンバーでチームを組み支援した。施工者も、文化財などの修理工事の経験のある工事会社を選定した。

復原の資金は、気仙沼風待ち復興検討会を受け皿として、ワールドモニュメント財団、(公財)文化財保護・芸術研究助成財団などの寄付金を原資としたSOC(東日本大震災被災文化財支援事業)支援基金を母体としている。その他、フリーマン財団や(公財)ナショナルトラスト、復興基金、全国からの寄付金、クラウドファンディングなど様々な方法で復原資金を集めた。

物件ごとの復原資金は、所有者の自己負担金とSOC支援基金だけでは不足であった。そのため、登録文化財設計監理事業補助(文化庁)、中小企業等グループ施設等復旧補助金(経産省)、基盤整備の移転補償費(国交省)等を見合わせ、補助対象項目を補助メニュー毎に区分しながら物件毎の復原資金確保を行った。



資金調達と体制図

5. 風待ちミュージアム

2020年度、震災から10年目を前に8棟の歴史的建造物が登録文化財として復原された。今後、東日本大震災の津波による被災を乗り越え連鎖的に復原されたこれら歴史的建造物群による「風待ちミュージアム」が、震災前の記憶を継承するだけでなく、災害を乗り越え新たな港町の歴史を継承していく。



復原された歴史的建造物



再建にも開催したモニターツアー
建物の歴史や被災状況を所有者自らが解説

今年で6年目となる「まちなか美術館」
各家にお宝を展示してもらい、それらを見学しながら風待ち地区を巡ることができる

再建後の土蔵では常設のほか企画展が開催されている(写真は土人形の企画展)

6. 歴史的建造物の修復

●角星店舗の修復

角星店舗は、昭和4年（1929）の気仙沼大火の復興期に建てられた木造2階建て店蔵造りの酒造店舗であり、敷地は内湾地区の海岸通りに面している。平面は敷地割に合わせた不等辺四角形で、柱や出桁、垂木を菱形に加工し、建物は海に向かって屋号を掲げる河岸特有の景観的特徴を喪失巧みに建築されている。建物は東日本大震災時の津波の被害により、1階部分は流失し、2階部も漂流したが、既存位置より約30mの位置に漂着した。

店舗としての主たる機能や平面形状は保全しつつ、設備は敷設替し、2階部分に保存修理工事の記録や震災の記憶を展示。また、建物そのものにも震災遺構としての展示的要素を持たせ、海水を被った当初の材料を一部そのまま保存するなど、建物の内部や修理のプロセスを見せる工夫も行った。



外観復原の様子。店舗としての主たる機能や平面形状は保全



被災直後の角星店舗



保存した2階部分

復原した1階店舗

(風待ちミュージアムとして活用)

●武山米店店舗の修復

武山米店店舗は、大正4年（1915）の大火で焼失。翌年に再建したが、昭和4年（1929）の大火で再び焼失し、昭和5年（1930）に現在の建物が建てられた。敷地は内湾地区を通る気仙沼街道の交差点の角地に位置し、奥に行くほど細い三角形となっている。平面形状は敷地形状に合わせた不等辺の扇形であり、扇状配列の垂木と出し桁など秀逸な大工技術によって構成されている。店舗の北側には同じく扇型平面形状の石蔵がある。建物は東日本大震災時の津波で1階部分が大破したものの隣棟に寄り添う形で倒壊は免れた。復原工事では土地区画整理事業による前面道路拡幅に伴い、主屋は存置した石蔵の側面に配置した。店舗機能や平面形状は保全しつつ、設備は敷設替し、石蔵の前にカフェ・イベントスペースを新設し風待ちミュージアムとしても活用。



外観復原の様子。石蔵の側面に配置した主屋



被災直後の武山米店店舗



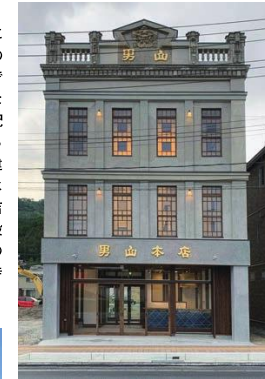
石蔵前のカフェ・イベントスペース
(風待ちミュージアムとして活用)

●男山本店店舗の修復

男山本店店舗は昭和4年（1929）の気仙沼大火の復興期に建てられた木造3階建ての酒造店舗である。敷地は内湾地区の海岸通りに面し、地域のランドマークとなる歴史的建造物であった。外壁は自然石（室根石）の洗い出し仕上げで厚重な正面外観を呈する近代建築であり、三方にパラペットを配し、縦長の上下窓等、昭和初期の近代建築に多く用いられる西洋建築の技術と意匠を反映した造形の模範となっている建築である。東日本大震災時の津波被害により、1、2階部分は倒壊し、3階部分のみが原位置に残った。復元工事では、店舗としての主たる機能や平面形状は保全しつつ、設備は敷設替え、2階を貸貸用スペースとして改修、3階は復元工事の記録や震災の記憶を展示、イベント等にも活用できる「風待ちミュージアム」として再生している。



被災直後の男山本店店舗



外観復原



新旧の左官補修の様子



3階内観復元写真

(風待ちミュージアムとして活用)



新設した3階までの階段

●男山本店客座敷の修復

男山本店は、海沿いにある店舗と山裾にある醸造工場施設としての酒蔵と客座敷を構え、一連の建築群を構成している。男山本店客座敷は、昭和7年（1932）の建築の和風建築である。入母屋瓦葺で、曲がり家の入隅部に表玄関を設け、周囲に庇を廻らし、二つの座敷を配して広縁を廻し、和風に造園した庭を設けた接客施設で、酒蔵の表構えに彩りを添えている。東日本大震災での津波被害は免れたが長く空き家となっていた。グループ補助金の被災した資産分の復旧補助金を新機能導入に転用するメニューを活用して、山裾の被災を免れた醸造工場施設群を再生した。客座敷は、酒蔵見学者の試飲場所、休憩、販売所として活用し、内湾に面した店舗と連携した接客空間としている。同敷地にある酒蔵も併せて修復工事を実施している。



改修前の空き家となっていた客座敷



外観改修の様子。耐震補強では格子耐力壁を活用



和室を改修したおもてなし空間



続き間の改修

(風待ちミュージアムとして活用)